

発達検査でわかること									
新版K式発達検査をめぐって							その1		
							大谷多加志		

はじめに

「発達検査の研究と研修の仕事をしている。」

何の仕事をしているかを問われて私がこう答えた時、友人は私が白衣を着て、脳波測定装置の前で細かな数値を記録している姿を思い浮かべたとか。

乳幼児や学童期の子どもに関わる現場では、近年、“発達障害”や“特別支援”が一大テーマとなり、子どもへのアセスメントツールの1つとして知能検査や発達検査にも関心が集まりました。私の職場で研究・発行されている「新版K式発達検査 2001」もその1つで、検査の実施法を学習する講習会に多くの人を訪れています。このように、児童福祉や教育などに関わる人たちの間ではどのようなものか周知されつつある「発達検査」ですが、一方で、それ以外の方から見ればまだまだ「何それ？」と言われてもおかしくない存在だと思います。

私は現在の職場で約 10 年間、この新版K式発達検査（以下、新K式検査と略記）の研究会、講習会の仕事に携わってきました。検査を作成した先生方をサポートする実務者として、研究会では資料収集やデータの整理、講習会ではアシスタントを務めています。今回、その経験の中で自分なりにこの検査について理解したことを紹介したいと思っています。目的はこの新 K 式検査が“どのようなものか”をお伝えすること。新 K 式検査は、もちろん“検査”ですが同時に、人間をみる時の1つの視点である、とも言えます。この視点は、この検査を使用するか否かに関わらず、「対人援助」を考える1つの切り口になるのではと考え、本稿を執筆することにしました。

新 K 式検査の概要

まず、極めて簡単にですが、新 K 式検査の歴史と概要を述べます。新 K 式検査の原型である「K 式乳幼児発達検査」が、1951 年、故生澤雅夫先生によって作られ、京都市の児童相談所（京都市児童

院、現在の京都市児童福祉センター)で院内検査として用いられていました。その後様々な経緯を経て、1980年に京都国際社会福祉センターから「新版 K 式発達検査」として公刊されることになりました。その後、時代に合わせた検査の再編作業があり、2002年に「新版 K 式発達検査 2001」が公刊されました。0歳の乳児から成人までに適用可能で、検査結果として発達年齢と発達指数が算出されます。検査に用いる用具は適用年齢の幅にふさわしく多種多様なものがありますが、乳児から幼児にかけて用いる用具はどちらかという「玩具」という趣です。もちろん脳波測定装置は含まれていません。

本稿ではこの新 K 式検査について、毎回1つのキーワードに沿って紹介していこうと思います。初回のキーワードは「発達検査でわかること」です。

発達検査でわかること

「こんなもんで何がわかるの？」

「検査？ほんの30分ほど玩具で遊んでただけなのに、それでウチの子の何がわかるの？」

発達という目に見えないものを数量化しようとする発達検査は、ともすれば懐疑的にも見られがちです。もちろん検査で何もかもがわかるわけではなく、講習会でもこの「検査の限界」については必ず触れていますが、まずは検査をとってそれから相談を

と考えていた援助者としては出鼻をくじかれるというか、いささかやりづらく感じてしまう言葉かもしれません。

検査に携わる人であれば一度は浴びるであろうこの言葉ですが、私自身は学生時代に新 K 式検査について学び始めた時、実の母親から言われることになりました。

私の弟は知的障害があり、それは乳児期から「言葉の遅れ」として表れていました。母は様々な福祉施設や療育機関に訪れ、弟は発達検査を受けました。結果として“発達が遅れている”という指摘はどこでも受けたものの、「じゃあどうすればいいの？」に対する答えはなく、母に残ったのは「結局親が何とかするしかない」「発達検査なんてデータを取るだけ。実験されているみたいで気分が悪い」という思いだけでした。大学で発達検査を学び始めた息子に対する複雑な心境が表情にも浮かんでいました。

このような経緯から障害というテーマは物心ついた頃から常に私の身近にあったのですが、私自身が発達検査に携わる仕事に就いたのはほぼ偶然で、何か縁のようなものを感じています。「発達検査もまあ役に立つじゃない」と検査を受けた人やその家族からも言ってもらえるように、そんなことを心の片隅に置きながら、新 K 式検査の仕事に携わっています。

前置きが長くなりましたが、では発達検査は役に立たないものかと言うと、もちろんそんなことはないと思っています。しかし、

単に検査をすればいいというものではありません。検査が役立つかどうかは、検査をどのように活用するか、検査場面の中で何を見つけるか、ということにかかっています。

構造化された観察場面

生澤先生は検査場面を「構造化された観察場面」と言っています。

熟練した発達相談員であれば、保育園等で子どもが自由に活動している場面を観察してその子の発達像をつかむことも可能ですが、発達についての深い理解と鋭い観察眼が必要になりますし、観察した活動の内容によって得られる情報が偏ることも避けられません。新 K 式検査は、こうした臨床観察を、名人芸ではなく、なるべく偏りなく行なうことができる、非常に有効なツールなのです。

新 K 式検査では、一定の手続きで構成された検査場面の中で、子どもがどのように反応するかを観察します。そして、子どもが状況をどう理解し、どう対応（解決）しようとしたかを、子どもの目線から考えることによって、子どもの認識世界を知り、発達を支える上で必要な関わりや手立てを考えていきます。

1つだけ例を挙げてみます。目の前に積木が置かれたとして、見ているだけの子どもいれば、掴んで口に運ぶ子、積み上げて遊ぶ子、積木を組み合わせて車や電車のようにして遊ぶ子など、その扱いは様々です。発達検査が着目しているのは、

このような積木の扱い方が、「年齢」という軸によって質的に変化していくという点です。大まかに言えば、生後半年くらいの子どもは積木を口に運んで感覚的に遊びますし、1歳前後には積んで遊ぶなど、物を用途に沿って扱う姿も見られるようになってきます。2-3歳頃には積木を車にして遊ぶなど「見立てて」遊ぶようになっていきます。このことから、逆に子どもの積木の扱い方を観察することで、およそどのくらいの年齢の子どもに相当する認知的な基盤を持っているかを推察しようとするのが発達検査の基本的な考え方です。

もちろん、1つの課題に対する反応だけで子どもの発達像がすぐに判断できるわけではありません。新 K 式検査は、他にも様々な課題状況を用意していますし、各種の課題から子どもの姿が徐々に多面的に浮かび上がってきます。そのために最も大切なのが、子どもの反応を「よく見る」ことなのです。さらに観察した子どもの反応を「どうしてそのように反応したのだろうか？」と子どもの目線から考えていくことも必要です。そういう意味ではやはり子どもを理解するためには十分な観察力と想像力が求められますが、それでも検査を用いることで、同じ状況に対する子どもたちの様々な反応を見ることができ、「この反応は前にも見たなあ」と類型化して理解したり、「これは初めての反応だ」と気になる反応にも気づきやすくなる利点があると思います。

「数値」の持つ力

一方で、フォーマルな結果として「発達年齢」「発達指数」が算出されます。数値で表される結果は、もちろん重要なものではありますが、功罪の両面を併せ持っていると言えると思います。

数値はパッと見てわかりやすいものです。「誰かと」「前回と」比較することも容易ですので、数値を聞いて大まかに子どもの様子を想像することができますし、前回と比較した時の変化も数値としてわかりやすく表れてきます。

一方で数値の厄介さを感じる場面も少なくありません。通常、検査結果は検査を実施した者が検査所見として、数値だけでなく臨床観察も含めて総合的にまとめます。しかし、結果を伝えられた人にとっては数値的な結果の方がやはりインパクトを持ちやすいように思います。また「1000円」と「980円」が人に与える印象が違うように、実質的にほぼ差はないのに、少しの数値の違いで印象が左右されてしまう場合もあります。

数値的な結果もちろん「発達検査でわかること」の1つなのですが、過大に見られたりひとり歩きしやすい傾向があるという点で、扱いには慎重さが求められます。

終わりに

新 K 式検査は子どもを理解するための有効なツールですが、同時にそれで全てが分かるわけではないという限界もありま

す。最後に生澤先生の言葉を紹介して、今回のまとめとしたいと思います。

「K 式をお使い下さる方の中にはおられないと思いますが、万が一にも、K 式でこういう結果になったのだから、この子はこうだ、とわかったつもりにならないでほしいと思います。K 式でわかるのは、あくまで子どもの位置側面です。やはり、子どもをもっともっとよく知り、そのことによって、子どもにすこしでもプラスになすように考えることが大切だと思います。そもそも K 式そのものが、大勢の子どもたちから学んだことの集大成なのですから」(生澤雅夫 発達をとらえる視点をめぐって 京都国際社会福祉センター紀要 発達療育研究 1996 年別冊)